

# 日本中世の武士をめぐる高校生の歴史認識

—高校生へのアンケート調査を通じて—

高木 徳郎

## はじめに

2022年4月、全国の高等学校に新しい学習指導要領（2017年改訂）が適用され、地理歴史科の歴史の分野では、「歴史総合」・「日本史探究」・「世界史探究」などの新しい科目が設置されて、その授業がスタートした。これまで多くの論者によって指摘されてきた通り、これによって高等学校における歴史教育は、大きく様変わりしていくものと見込まれる。

ただ、このうちの「歴史総合」については、これまで学界もしくは教育現場において、その内容がどうあるべきかが活発に議論され、一定の知見が共有されてきたと思われる一方、多くの学校で2年生以上に配当され、2023年度以降に実際の授業が開始される見込みの「日本史探究」・「世界史探究」の授業をどう教えるかについての議論は、概して低調ではないだろうか。新しい学習指導要領を読む限り、教室での授業の構成や展開の方法は、「歴史総合」以上に大きな変更が求められているようにも感じられるだけに、この現況はきわめて憂慮されるべき事態と言わざるを得ない。

そこでこのたび、とくに今後開始される「日本史探究」の授業作りに活かすため、現在の高校生がどのような歴史認識をもっているのか、具体的なテーマを設定しつつ探るアンケートを実施した。その後、アンケートを集計した結果、今後開始される「日本史探究」の授業作りに活かせるのではないかと思われる知見も得られたので、以下で報告したい。とくに今回のアンケートで意図したのは、日本中世において、「武士」がどのように登場してきたのかということに関して、高校生がどのようなイメージを持っているのか、という点であった。きわめて限られたテーマ・内容に絞って行われたアンケートではあったが、高校生が日本史の学習を進めるにあたって、具体的にどのような点でつまづき、その後の学習の進展を阻害しているのかを具体的に把握すること、また現在の高等学校で行われている歴史教育が、現在の最新の歴史研究とどの程度懸隔しているかを、より実態に即して把握することは、今後、「探究」的な歴史教育を構築していくためには不可欠な作業であると考えられる。まずは現在の高校生の歴史認識を正確に把握し、現状における問題点をきちんと把握することを目的に、このようなアンケートを実施した次第である。

## 1. アンケートの趣旨と概要

高等学校で使用されている教科書や一般に流布している概説書等では、日本中世（11世紀末～16世紀末）は「武士の時代」と言われることが多い。日本中世の武士に関する歴史研究は、ここ数十年で大きく進展してきた分野と言え、そうした研究の進展を受けて、教科書の記述も少しずつ改善されてきた。今回のアンケートでは、こうした新しい教科書記述と研究成果がどれほど現在の高校生に浸透しているのかを探り、その実態をふまえてどのように日本史の授業を組み立てていくのかを検討するため行ったものである。

アンケートは、2021年6月から7月にかけて、首都圏（東京・神奈川・埼玉）の私立・公立の高等学校（6校）の1～3年生の生徒を対象に行われ<sup>(1)</sup>、最終的に1745人（高1生560人、高2生730人、高3生455人）から回答を得た。事前に内諾を得ていた学校にアンケート用紙（資料1）を送り（必要に応じて学校長の承諾を得た）、授業時間もしくはホームルーム等の時間を活用して、印刷したアンケート用紙を教室で配布し、生徒自身の回答を記入してもらった上で回収するという方法をとった。記入にどれほどの時間をかけて頂くかは各学校に委ねたので、必ずしも一律ではないが、おおむね5分～10分程度であったと想定している。

### 「武士」についてのアンケート

\*これはテストではありませんので、気楽に答えて下さい。

- 武士はいつ頃、社会の中に登場したと思われますか。下記の年表中、適当と思う時期 A～F から1つ選んで○印を付けて下さい。
 

672	752	802	939	1016	1156	1185
壬申の乱	A 東大寺大仏完成	B 坂上田村麻呂	C 肥後城を築く	D 承平天慶の乱	E 藤原道長の摂政就任	F 保元の乱
- 武士になった人々は、もともとはどのような人々だったと思われますか。次の A～F から選んで下さい。答えは1つだけでも、複数選んでもかまいません。
 


A 都の貴族	B 都の庶民	C 地方の豪族	D 地方の農民
E 奴婢	F 蝦夷		
- 武士はなぜ、登場しましたか。答えは1つだけでも、複数選んでもかまいません。
 

A 災害が頻発していたから	B 都で盗賊が横行していたから
C 貴族に差別されたり、迫害されたから	D 地方の治安が悪化したから
E 怨讐がたかさん発生していたから	F 天皇の支配を強化したかったから
G 自分の土地や財産を守りたかったから	
- 武士の役割(仕事)は何だと思われますか。適当と思われるものすべてに○を付けて下さい。
 


A 官僚、政治家	B 悪事の取り締まり、警察	C 農業、土地の開発
D 戦闘、武芸の鍛錬	E 貴族の護衛	F 主人(将軍・大名)への奉仕

5. 以下の A～F の中から、あなたが考える武士のイメージに最もあてはまるものに1つ○印をつけて下さい。また、下記の( )内に、あなたがそれを選んだ理由を書いて下さい。


A




B




C




D



E



F



( )

質問は裏面にもあります。

資料 1

なお、アンケート用紙（資料1）の設計は、2021年度本学大学院教育学研究科社会科教育専攻（修士課程）の選択科目「歴史学特論Ⅱ-1（日本中世史）」を履修している大学院生たちとともにその内容を考案した。また集計作業にも同じ大学院生たちの協力を得た。

## 2. アンケートから分かったこと

以下、アンケートを集計した結果、全般的な傾向として読み取れることを、それぞれの設問ごとにみていきたい。なお、集計作業は、アンケートを実施した高等学校のクラス分けに応じて、高1・高2文系・高2理系・高3文系・高3理系に分けて集計した。

### (1) 武士の登場についての理解

まず、《設問1》は、武士はいつ頃、社会の中に登場したか、という問いであり、アンケート用紙に年号（西暦）を記載したスケール（軸）を表示し、それぞれの年号のところにはその年に起こった著名な事件・出来事を示した（資料1）。選択肢A～Fは、それぞれの事件・出来事の中に置き、「だいたいこの事件とこの事件の間の時期に武士が登場した」という形で回答してもらおうと考えた。武士の発生という社会現象は、はっきり「この年に発生した」と言える性格のものではないため、生徒たちの歴史認識として、大体どれくらいの時期に武士が登場したとイメージしているのかを探りやすくするための工夫として、このような問いの形式をとった。

その結果は、図1～5の通りである。現行の教育課程や進路に応じたクラス編成による科目配当の関係もあると思われるが<sup>(2)</sup>、高1（図1）や高2理系（図3）では、回答にかなりのばらつきがあることが分かる。これは、中学校における学習の内容にも一定の問題が含まれていることを示しているとも受け取れる。最初の選択肢Aが置かれているのは672年の壬申の乱の後であり、最後の選択肢Fが置かれているのは1185年の平氏滅亡の前である。この間、500年ほどの時間が経過していることをふまれば、高等学校できちんと日本史を学ぶ以前の高校生の歴史認識においては、「武士」という社会集団がいつ頃から社会に登場してくるのかということについての、明確なイメージが定着していないということが窺える。一方、アンケートの実施時期が6～7月であったため、入試に向けて日本史を学ぶ生徒が一定数含まれると見込まれる高2文系（図2）・高3文系（図4）においても、学校やクラスによっては「武士の登場」についての学習を終えていない生徒もある程度はいたことも考えられるものの、選択肢Cと選択肢Eに回答が割れる傾向が読み取れ、やはり、武士が登場する時期についての明確なイメージが定着していないことが窺える。

ここで、現在の高等学校で使用されている教科書において、武士の登場が実際にはどのように記述されているのかを確認しておこう。

#### 資料2 山川出版社『詳説日本史 改訂版』（2016年検定済）

9世紀末から10世紀にかけて地方政治が大きく変化していく中で、土着した国司の子孫や地方豪族は、勢力を維持・拡大するために武装するようになり、各地で紛争が発生した。その鎮圧

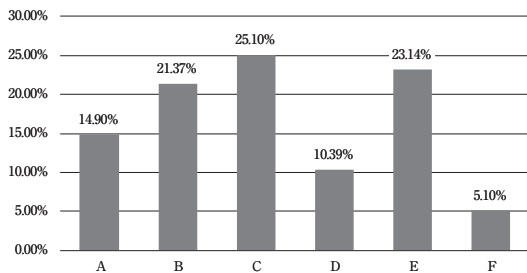


図1（高1）

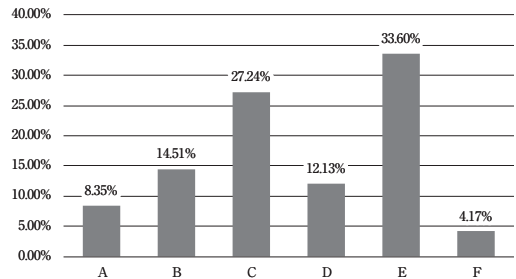


図2（高2 文系）

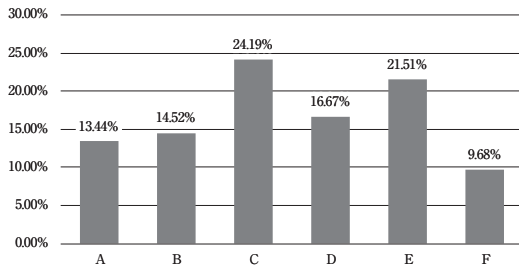


図3（高2 理系）

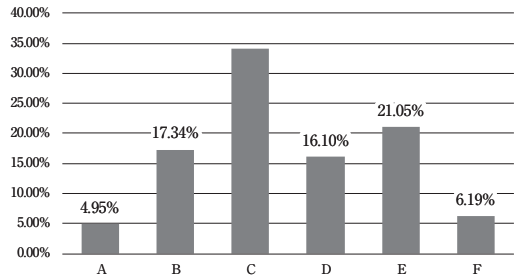


図4（高3 文系）

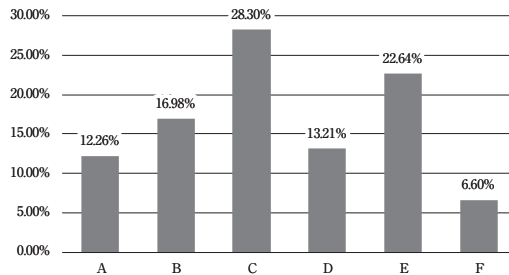


図5（高3 理系）

のために政府から押領使・追捕使に任じられた中・下級貴族の中には、そのまま在庁官人になって現地に残り、有力な武士（兵）となるものが現われた。……

### 資料3 実教出版『日本史B 新訂版』（2017年検定済）

9世紀後半になると、……地方豪族などは国司の支配にしばしば反抗するようになり、武装して国司を襲撃する事件さえおきた。また、彼らの中から、集団で武装して、都に運ばれる調庸物を略奪する者もあらわれた。これに対し政府は、武力をもつ貴族を派遣したり、国司に武装させたりして対処した。こうした政策によっても群盗の蜂起を完全にしずめることはできなかったが、鎮圧に動員された貴族のなかから、現地の武装集団を従えてそのまま土着し、武士化する者も出現した。

ここからも分かるように、現在の教科書では、武装している者や武力を持っている存在を単純に武士と記述しているわけではない。むしろ、上記二つの事例から分かるように、地方において武装する豪族や土着した国司の子孫たちで略奪などに従事する者に対し、政府からその鎮圧のために派遣され

た都の「貴族」・「中・下級貴族」を「武士」と定義づけている。このように、元来、正反対のイメージをもたれがちな「貴族」と「武士」が、もともと同根の存在であることを明らかにしたのは1980年代後半から1990年代の武士研究の成果であったが<sup>(3)</sup>、そうした30年以上前の研究成果が、果たして現在の高校生にどの程度浸透しているのかをみようとしたのが《設問2》であった。

《設問2》は、武士という社会集団が社会に登場する以前、彼らはどのような身分であったかを問う設問であった。回答の選択肢として、Aに「都の貴族」、Cに「地方の豪族」、Dに「地方の農民」を配し、上述したような1980年代後半以降の研究状況がどれほど高校生に定着しているのかを見積もり、資料2・3のような教科書の記述が、現在の高校生に受け入れられる基盤となり得るのか否かを考える材料とする狙いがあった。

アンケートの結果は図6～図10の通りである。学年および文系・理系を問わず、武士はC「地方の豪族」から生まれた、との認識が大勢を占め、2番目に多かったD「地方の農民」も含めて、武士は

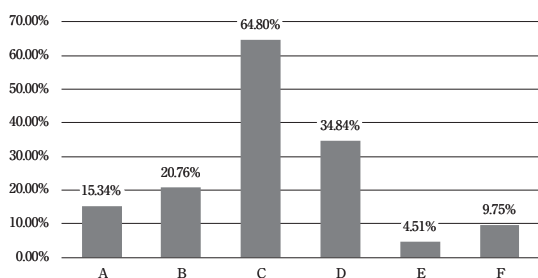


図6 (高1)

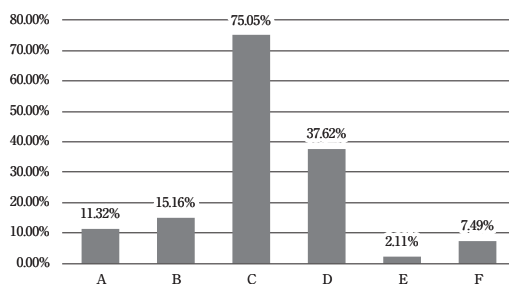


図7 (高2文系)

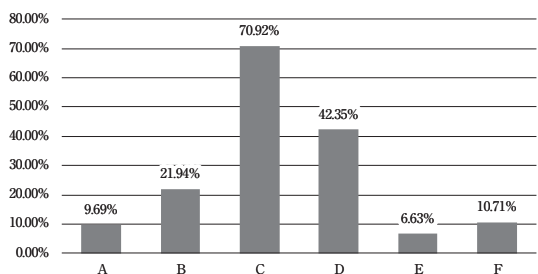


図8 (高2理系)

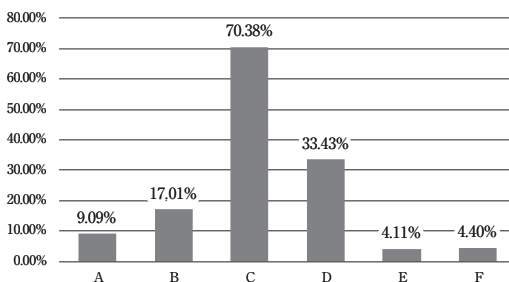


図9 (高3文系)

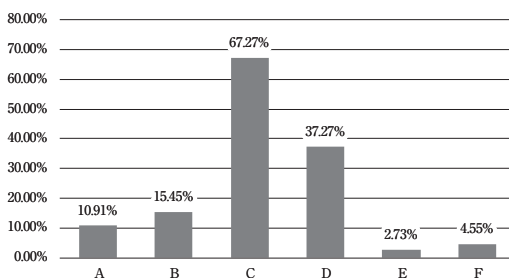


図10 (高3理系)

地方から生まれたと考えるのが、現在の高校生の一般的な認識であることが分かる。これに対し、武士は「都の貴族」から生まれたと考える選択肢 A の回答は、いずれのカテゴリにおいても 10～15% 程度で、学年を経てもこの傾向に大きな変化はみられず、既に資料 2・3 の教科書記述を目にしているはずの高 3 文系の生徒（図 9）であっても、上述のような研究状況が定着しているとは、残念ながら言い難い現状であることが分かった。なお、《設問 2》から《設問 4》までは、複数回答を許容しているため、数値の合計は 100% を越えている。

この傾向と密接に関連すると思われるのが《設問 3》である。《設問 3》は、武士が何故社会の中に登場したのか、というその要因を問う設問であった。《設問 2》に対して、何故、武士が都ではなく地方から登場してきたとイメージし易いのかということを考えて、都＝洗練され、高貴なイメージ、地方＝野卑で、粗暴なイメージという、一般に流布した固定的な対立イメージの影響があるように思われる。そうした中で、古くからよく言われてきたのが、「自分の土地や財産を守るため」に武装をはじめたのが武士の起り、とみる見方である。そこで、選択肢 G として、「自分の土地や財産を守りたかったから」を配し、その他、選択肢 D として、「地方の治安が悪化したから」も設けた。一方、武士が都の貴族から生まれた、とみる回答も一定数あると見込んでいたため、選択肢 B・E として、高校生にもイメージしやすそうな、B「都で盗賊が横行していたから」・E「怨霊がたくさん発生していたから」を配しておいた。

これに対する高校生の回答結果は図 11～図 15 の通りである。学年や文系・理系の別を問わず、G「自分の土地や財産を守りたかったから」の選択肢を選んだ高校生が 60～70% 程度と高い数字を示し、（但し複数回答可）。高 2 理系・高 3 理系と日本史 B を選択しない生徒ほど、その率が高かった。2 番目に多い回答はいずれのカテゴリでも D「地方の治安が悪化したから」であり（40% 前後）、やはり、武士が都から発生するというイメージは薄く、地方において、治安の悪化に対応して、自らの土地や財産を守るために武装し、武士が生まれたというイメージを持っている高校生が圧倒的に多いことが分かった。ただ、その一方で、どの学年でも 20% 前後の生徒が B「都で盗賊が横行したから」を選択していることから、都でも地方でも、治安が悪化することと武士の発生という社会現象は、高校生の中では結びつけやすい組み合わせであることが窺えた。

なお、この「自分の土地や財産を守るため」という通俗的な武士登場理解に何ら学問的な根拠がないというわけではない。本来、戦闘集団・武力集団である武士ないしは武士団の登場を、社会経済史的観点から説明した平易な表現が「自分の土地や財産を守るため」という説明表現であり、そこでは武士（団）の実体は、おおむね田堵や名主といった地主層、開発領主などの領主層、豪族的領主層の三タイプに類別されるとされてきた<sup>(4)</sup>。その上で安田元久は、以下のように述べている<sup>(5)</sup>。

#### 資料 4 安田元久「武士団の形成」

……結論的にいうならば、十一世紀ごろに各地に発生した武士勢力のなかで最も普遍的で、また武士階級の中核となるものは、上述の第二の類型に属する開発領主的な領主層であり、……この領主層が大体において前時代の名主・大名田堵などの在地勢力者に系譜的につながることは確

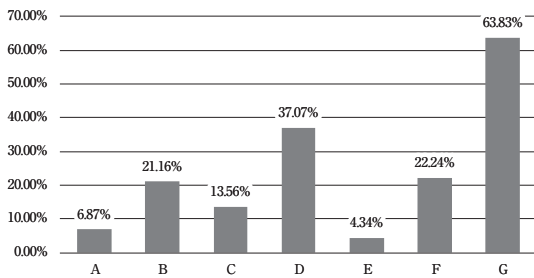


図 11（高 1）

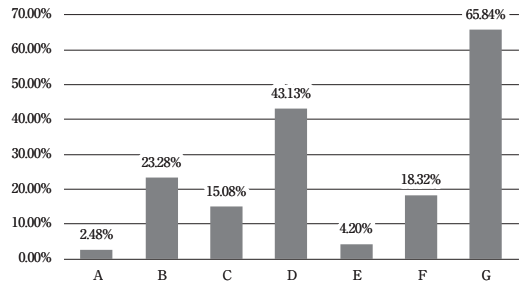


図 12（高 2 文系）

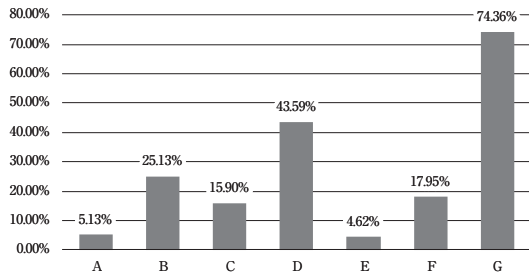


図 13（高 2 理系）

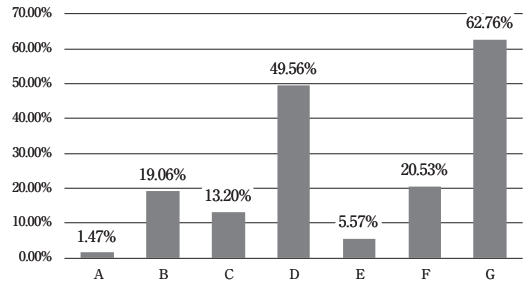


図 14（高 3 文系）

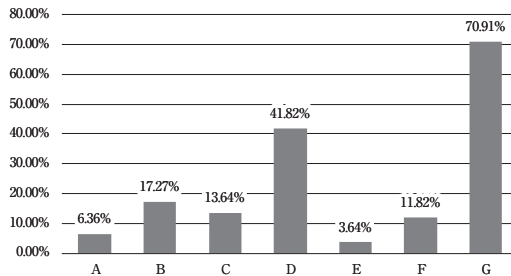


図 15（高 3 理系）

かであろうと思う。

このような領主化の過程にある在地勢力者は、……その支配地＝所領を国司の干渉から守るため、いわゆる領主権留保の土地寄進を行い、……荘園領主たる権門寺社の権威によって、国司に代表される律令国家権力の干渉を排除する保証をえていた。しかし……そのみでは他の在地勢力の侵入や国衙の干渉を排除し、また付近村落の名主・百姓を抑えてその支配を貫徹することができなかった。そこで彼ら在地領主層は、その支配を維持し、さらに勢力を伸張するため、自らの武力を蓄え、武士化するのである。

ここから分かるように、「自分の土地や財産を守るため」に武士が発生したという理解は、1950年代後半から60年代初頭にかけての古典的な学説に根拠があるが、現在の高校生の多くは、高校での学習以外の場（もちろんそこには小中学校での学習も含まれる）においてこうした学説に影響を受けた何らかの言説にふれ、高校での学習を経てもその認識が大きくは更新されずに大学や世の中に出て

行っているであろうことが想定できる。そのことの意味合いについては本稿とは別に考察する必要があるが、ここでは高校生の武士に関する歴史認識が、1950年代後半の歴史研究のレベルと大きな差がない事実を確認しておきたい。

## (2) 高校生の《武士》イメージ

一方、現在の高校生が武士の存在そのものについてどのようなイメージを持っているのかを問おうとしたのが《設問4》・《設問5》である。このうち《設問4》では、武士の役割・仕事は何だと思うかと問うた。その結果は図16～20である。

回答で多かった選択肢は、D「戦闘、武芸の鍛錬」・F「主人（将軍・大名）への奉仕」・E「貴族の護衛」・B「悪事の取り締まり、警察」の4つで、このうち、D「戦闘、武芸の鍛錬」とF「主人（将軍・

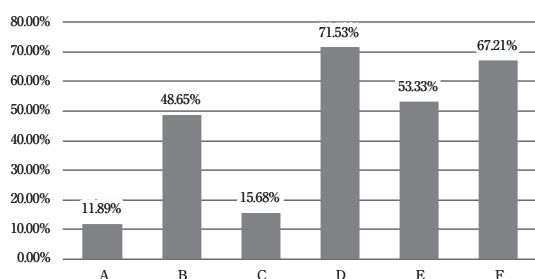


図16 (高1)

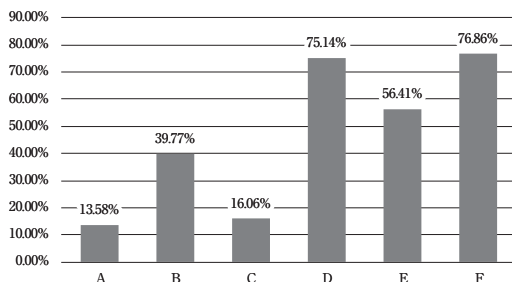


図17 (高2文系)

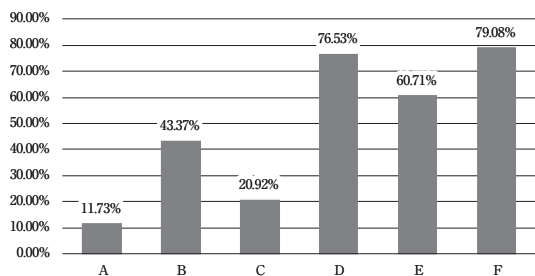


図18 (高2理系)

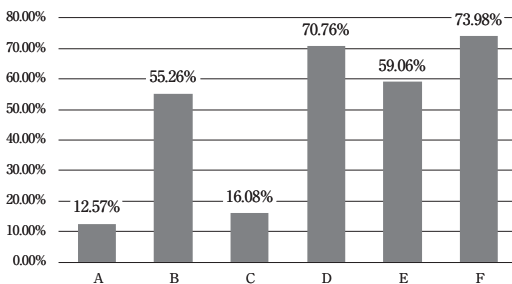


図19 (高3文系)

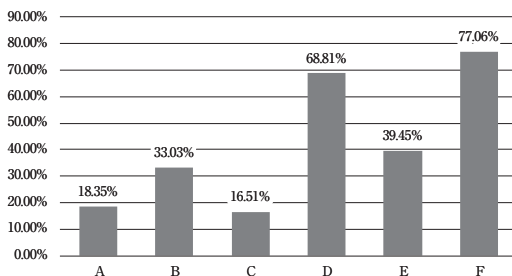


図20 (高3理系)



大名)への奉仕」は、いずれのカテゴリでもほぼ7割以上の高校生が武士の役割(仕事)と認識していることが分かる(但し、高3理系の選択肢Dのみ、68.8%で7割を若干下回る)。D「戦闘、武芸の鍛錬」は武士の仕事として誰もが思い浮かべるものであろうが、F「主人(将軍・大名)への奉仕」は、どちらかと言うと近世の武士をイメージするような場合、これを選択することもあるのではないかと想定して設定した選択肢であった。しかし、数字としてはわずかな違いではあるが、高1以外のカテゴリにおいて最も高い数値を示したのが、このF「主人(将軍・大名)への奉仕」であり、戦闘やそれに対しての備えよりも、自らが仕える主人に奉仕する姿というイメージが、現在の高校生が抱く武士の仕事のイメージとして最も強いイメージであったのは、正直意外であった。但し、後述するように、高校生が抱くこのイメージは、次の《設問5》の結果とも整合的であり、現在の高校生にとっては、「戦う武士」というイメージよりも、「主人に仕える武士」というイメージの方が強いようである。

その一方で、B「悪事の取り締まり、警察」は4つの中で一番少ない点で共通し、とくに高3理系(図20)において他の3つの選択肢よりかなり少ない(33.0%)という結果となった。高2文系でも同程度に少ないことから(39.8%)、この選択に関しては、文系・理系に大きな差はないことも窺える。また、高3理系では、E「貴族の護衛」を選択した割合も4つの選択肢の中では少なく、B「悪事の取り締まり、警察」とE「貴族の護衛」は、生徒によっては武士の仕事としてのイメージが比較的薄いということも分かった。

この結果に関しては、やはり近年の研究成果や教科書記述との関係が気になるところである。というのも、近年の武士研究の成果では、武士の役割(仕事)として、平安京内の治安警察・司法業務を担った検非違使や、衛門府・兵衛府・近衛府など都や内裏の警備を担当する朝廷内の各部署に所属する武官、さらには前掲の資料2・3で紹介した教科書記述のように、押領使・追捕使といった官職との関係が注目されてきているからである。すなわち、武士の発生をこうした武官に由来すると考えるわけだが、今回の《設問4》の集計結果からは、こうしたイメージは、現在の高校生にはさほど浸透しておらず、高校での学習を経ても、それが更新されないまま卒業を迎える実態が浮き彫りになったと言えよう。

最後の《設問5》は、資料1の通り、教科書や副教材などに掲載されている画像資料を6点挙げて、その中から「あなたが考える武士のイメージに最も当てはまる」画像はどれかを択一にて問うた。ちなみに、選択肢Aは、月岡芳年という浮世絵師の作品で、西南戦争に関する錦絵「鹿兒嶋征討記ノ内賊徒女隊勇戦之図」に描かれた明治期の警察官、選択肢Bは、鎌倉時代後期に制作された「春日権現験記絵」という絵巻物に描かれた、平家の都落ちに従う摂政近衛基通に随従する家司や武士たち、選択肢Cは、鎌倉時代後期に制作された「男衾三郎絵詞」という絵巻物で、笠懸と呼ばれる武芸の鍛錬を行っている武士の画像である。《設問4》や《設問3》との関係で言うと、選択肢Bは武官系の武士を描いたものと言え、画像の中には、厳密に言えば、武士というよりは貴族の家に仕える従者や官人などが含まれており、《設問4》における選択肢E(貴族の護衛)を画像化したものと言える一方、選択肢Cは、地方武士の生活ぶりがよく窺われる絵巻物の一シーンで、そのイメージは開発領主から成長し、《設問4》における選択肢G、自分の土地や財産を守る武士のイメージに重なる。

また、選択肢 D は鎌倉時代後期の絵巻物「天狗草子（興福寺巻）」（模本）に描かれた、鎧に身を固め長刀を持って集まる悪僧（僧兵）たち<sup>(6)</sup>、選択肢 E は室町時代後期に制作され、応仁の乱における市中の様子を含め、京都の真如堂の創建やその本尊の由来を説いた絵巻物である「真如堂縁起絵巻」に描かれた足軽たち、選択肢 F は、江戸時代に、湯島にあった聖堂学問所にて儒学の講釈を受ける幕臣や藩士たちの画像である。選択肢 D の悪僧や選択肢 E の足軽が、日本史学上の武士の概念に当てはまらないことは言うまでもないが、とくに選択肢 D の悪僧は鎧を着用し、長刀という武器を手に行っていることから、外見上は武士のいでたちと一定の近似性がある。一方、選択肢 F は、言うまでもなく近世の武士の姿を描いた画像であり、現在の高校生が、何の前提もなく「武士」という言葉を聞いた時、果たして中世の武士を思い浮かべるのか、近世の武士を思い浮かべるのかという点への関心から、選択肢として配置した。

この問いに対する高校生の回答は図 21～25 の通りである。最も多かった回答は選択肢 C（男衾三

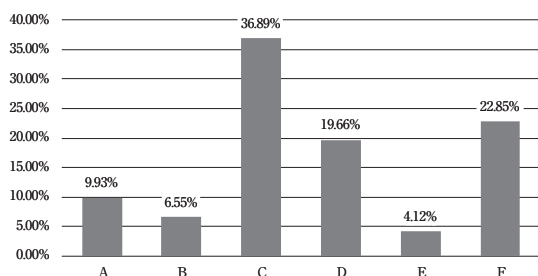


図 21（高1）

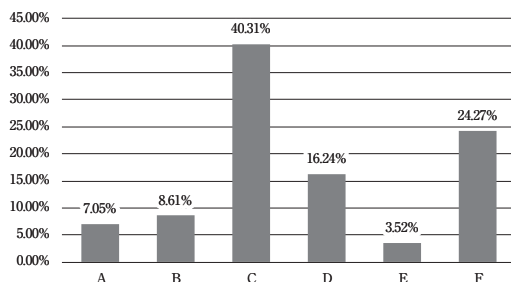


図 22（高2文系）

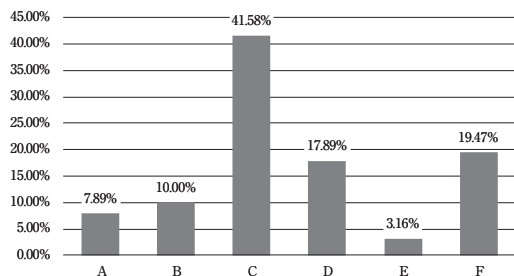


図 23（高2理系）

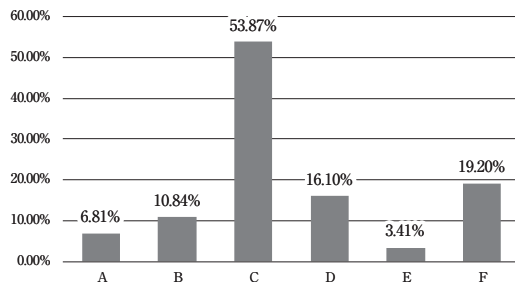


図 24（高3文系）

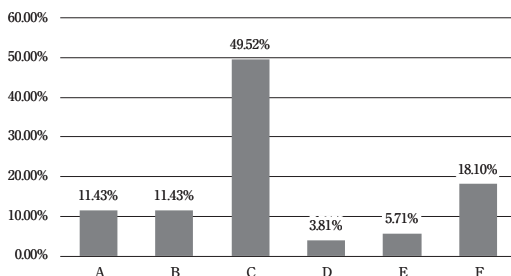


図 25（高3理系）

郎絵詞)で、学年や文系・理系に関係なく突出して多く、なおかつ、高1から高3にかけて、漸次、選択する割合が高まっていく傾向も見えてとれた。この画像は、中学・高校ともに、教科書では鎌倉幕府の成立などを学んだ後、武士の生活やその社会を学ぶ単元で必ずと言っていいほど掲載されている画像で、絵巻物という視覚資料が高校生に与えるインパクトの大きさを改めて示す結果となった。但し、高1では選択肢D(悪僧)や選択肢F(聖堂学問所で講釈をうける近世の武士)も20%前後が選択しており(図21)、《設問4》において、近世の武士を彷彿とさせる選択肢F(主人への奉仕)を選択した高校生が意外と多かった点と軌を一にする結果とも言えるかも知れない。その上で《設問5》では、高3でそれらの選択肢が減り(図24・25)、選択肢Cが増える傾向にあり、選択肢Cの画像が高校3年間の学習を通じて、高校生に武士の画像として定着していつている様子が窺える。なお、選択肢Cの画像は、中学校の教科書にも掲載されていることをふまれば、中学での学習よりも、高校での学習により、より深く印象づけられている可能性もあり、授業等において視覚資料を効果的に使うことの有効性が改めて浮き彫りになったかと思われる。

### 3. 新しい授業像への展望

以上、高校生へのアンケート調査により、現在の高校生が歴史的存在としての「武士」を具体的にどのように捉えているのか、おおよそ見えてきた。これをふまえて、今後、新たに設置された「日本史探究」の授業を構想する場合、どのような点に注意すべきかを述べて、本稿の結びとしたい。

まず、《設問1》・《設問2》・《設問3》の回答結果から分かったように、いつ、どのような人々が、いかなる理由で「武士」として社会に登場したのかについての認識が曖昧である現状は、決して好ましい状況とは言えないであろう。もちろん、問題の性質上、いつ(何年)に登場したと明記できる事柄でないことは言うまでもないことではあるが、現在の学界で大方の支持を集めているように、武士の登場の契機としての承平・天慶の乱(天慶の乱)が、現在以上に授業の中で強調されてしかるべきであろう<sup>(7)</sup>。ここで注意しておきたいのは、承平・天慶の乱を起こした平将門や藤原純友は、有り体に言えば「武士」ではなく、これを鎮圧した側、ないしはその子孫が、後世、「武士」と認識されるようになる、という点である。武士が軍事貴族であるという認識もここから生まれたものであり、武士という歴史的存在を、地方よりは都に、あるいは貴族的な存在にゆかりがあるという新しい歴史認識を、これまでの古典的な認識と対比させつつ、「探究」的に授業を展開していくという授業のあり方が模索されるべきではなかろうか。

なお、この際、古代社会から中世社会への移行にあたって、人と人とを結びつける原理が、「ウジ」的な結合から「イエ」的な結合に移り変わっていくという点にも注意を向けさせる必要がある。『今昔物語集』に収録されている「袴垂」という大強盗の説話<sup>(8)</sup>にみられる「家ヲ継ギタル<sup>つわもの</sup>兵」という認識などにも注目させつつ、そうした認識の発生と武士の登場を関連付けさせながら授業が展開できれば、より立体的で豊かな歴史像を抱かせられるのではないかと期待したい。

一方、この単元のもうひとつの柱は、やはり武士が社会においてどのような役割を果たしていた存

在なのか、ということについての正確な歴史認識をどう育んでゆくかということではないだろうか。《設問4》の結果からは、「戦闘」や「主人への奉仕」を武士の仕事と捉える高校生が多いことが裏付けられたが、戦争やそれに向けた準備という非日常的な側面のみではない、日常世界での武士の姿を、できるだけ実態に即して「発見」させていく授業が求められるだろう<sup>(9)</sup>。そしてその際には、《設問4》では必ずしも選択者が多くなかった貴族の護衛や治安警察などの業務に従事する武士や武官の姿などを描いた絵画資料などから、そうした仕事に対する社会のニーズやその背景などへも認識を広げていければよいのではないだろうか。《設問5》の回答結果が示しているように、絵巻物などの視覚的な教材の活用は、授業においてはきわめて有効であることをふまえれば、そこから解答に結びつく「発見」を体験させるのは、「探究」型の授業にはやはりふさわしいものと言えるだろう。

但し、絵巻物を含めた絵画資料を歴史の資料として活用するには注意点も少なくない。しかし、その点は、やはり新設され既実践がなされている「歴史総合」の導入において学ぶべきことがらである。「歴史総合」と「日本史探究」を効果的に連携・接続することで、よりよい歴史の授業が構築できればと考える。

## 注

- (1) 具体的な学校名の開示は控えるが、設置者別では公立校1校・私立校5校、男女別では共学校1校・男子校4校・女子校1校という内訳であった。学力的には概ね中堅～進学校と認識されている学校が中心であった。筆者の個人的なつてを頼りにアンケートに協力して頂ける学校を探したため、こうした内訳となった。これによってアンケート結果に大きな偏向が生じているとは考えていないが、学ぶ学校の違いや男女間で生じる歴史認識の差については、今後の課題として認識しておきたい。
- (2) 高等学校における現行の教育課程では、「武士の登場」について詳しく学ぶ「日本史B」という科目は2年生（場合によっては2・3年次の2ヶ年）に配当されていることが多い。また、入試科目において「日本史」が課されていない大学への進学を目指す生徒が一定数含まれていると見込まれる高2理系のコースなどでも、2年次においては日本史を配当していない学校が一般的である。したがって、高1生や高2・高3生でも理系コースの生徒は、この時点では、中学生までの知識のみを身につけているということになる。
- (3) 高橋昌明『武士の成立 武士像の創出』（東大出版会、1999年）
- (4) 小野武夫『日本庄園制史論』（柏書房、1943年）、安田元久「武士発生史に関する覚書」（初出1955年、のちに同編『日本封建制成立の諸前提』に改題のうえ所収、吉川弘文館、1960年）
- (5) 安田元久「武士団の形成」（『岩波講座 日本歴史 古代4』所収、岩波書店、1962年）
- (6) 一般に流布している「僧兵」の語は、実は同時代の史料ではまったく使われていない用語で、江戸時代において、僧侶の武装が異様であるとの認識のもと使われ始めた用語であることから、近年、歴史用語としての使用を避ける動きがある。黒田俊雄『寺社勢力』（岩波書店（新書）、1980年）
- (7) 《設問1》の回答で選択肢Cが多かったのは、その前に起こった「坂上田村麻呂、胆沢城を築く」（選択肢B）に引っ張られての結果かと推測される。
- (8) 『今昔物語集』巻二五ノ第七「藤原保昌朝臣値盗人袴垂語」
- (9) その点、2022年3月から5月にかけて開催された国立歴史民俗博物館の企画展「中世武士団」は、領主としての武士の姿を前面に打ち出した展示で、歴史教育においては必ずしも強調されていない、武士の新たな側面を一般市民に普及させる意図が感じられる展示であった。